

ヤオマニアの横顔

音楽プロデューサー・作曲家・編曲家

本間昭光さん

「八尾といえばもう『朝吉』ではなく、音楽!と言いたいですね」



広沢タダシさん(右手前)や地元ミュージシャンたちとの共演を最後列で支え、ボーカルの声が少しでも前が出るように細心の注意を払って演奏する。「広沢くんの声は、心地よくて、エッジが利いて、説得力がある」。安中新田会所跡日植田家住宅にて

りが少なかつたので、今の話を聞くと、とてもうらやましいですね。

バックと裏方を経験した先に。

4歳のときから習っていたピアノは練習がイヤになって途中でやめたのですが、合唱コンクールでピアノを弾く人がいなかったたので、代役として立候補したんです。その時からでしょうか、自分が前に出るのではなく「バックで支える」ことの楽しさに目覚めたのは。

八尾高校時代は吹奏楽部が廃部になっていた(P4)ので軽音楽部に入っていた同級生である今の事務所の社長と出会い、放課後はもっぱら近鉄八尾駅前にあった小阪楽器(現在はアリオ八尾に移転)のスタジオで練習する日々でした。大学でもバックミュージシャンをしたりシルキーホール(梅崎貴史さん(P10)に付いて音響の仕事をしたり。そんなとき憧れの松任谷正隆さんと知り合う機会があった「本気なら東京に出て来る?」と言われたんです。はい!と即断しました。

音楽で食べていけるのは一握りだけです。当時、国語の教師をしていた父に報告したら「好きなことを仕事にできるならそうしろ」と言われて気持ちが悪くなりました。

りました。父も新聞記者の夢があったのに断念した気持ちを、子どもには抱いてほしくないと思ったのかもしれない。小学生の頃に「博物館の学芸員になりたい」と相談した時には「そんな辛気くさい仕事やめとけ」と言っていたんですが(笑)。

「八尾フェス」は遠くない。

今はメールのやりとりだけでも曲が出来てしまったり、ライブのボーカルも技術で直してしまう時代ですが、できるだけ「人と共有する」音楽の力を大事にしてほしいと思います。僕はバックで演奏するのなら、歌がちゃんと唄える人とやりたい。これは「上手い」だけではなく「歌が好きの人」という意味です。

今回、同じ八尾出身の広沢タダシさんと一緒にライブやトークショーもできたので、いつか八尾の音楽好きな人たちと八尾フェスを実現したいですね。龍華中の後輩には清水翔太くんがいますし、先輩にはなんといっても、天童(よしみ)先生がいらっしやいますから。

取材・文 中島淳 写真 内池秀人

僕

が八尾で生まれたのは、国鉄(現JR)に勤務する祖父が亀山から八尾駅長に異動することがきっかけだったようです。自宅は線路の南側。蒸気機関車が志紀の方からやって来るとすぐに「洗濯物しまえ!」と大騒ぎでした。歴史や文化財や昆虫採集に興味があって、自転車であちこち行くのが好きな子どもでした。山本でナマの今東光を見たことは、今ではちょっと自慢です。

吹奏楽部で名伯楽に出会う。

龍華中学校時代には吹奏楽部に入って

フルートを吹いていました。理由は単純で「他の管楽器のように」譜面を書き直さなくてもいい」「軽い」「家でも練習できる」というものです。でもやり始めてからはトロンボーンのほうがよかったです。かな、なんて(笑)。顧問の首藤(えつ子)先生(P7)はすごく厳しかったけれど楽しかったです。「ちょっと無理めの課題曲」が来るんです。「シベリウスのフィンランドディアやて!? どうしよう…」って感じ(笑)。関西吹奏楽連盟の大会では「銀」までいきましたが「上には上がいる」と感じました。当時は吹奏楽も横のつなが



母校、八尾高の「狐山」にて広沢タダシさん(手前)と。広沢さんの本間評は「ユーモアがあり、ていねいで、表現が明確。歌のいいところを、しっかり盛り立ててくれる人」

ほんま・あきみつ

1964年八尾市生まれ。龍華小、龍華中、八尾高、関西学院大学を経て上京し、キーボード・アレンジャーとして活動。梶原敬之のコンサートでキーボード及びアレンジメントを担当。99年にボルノグラフィティのデビューに伴い、「アポロ」「サウダージ」などを作曲(編曲・プロデュースも)。2009年からいきものがかりの編曲とプロデュースを手がける。2015年11月27日、東京のNHKホールで生誕50周年の「本間祭」を松任谷正隆、ボルノグラフィティ、広沢タダシ、いきものがかり、武部聡志、藤井隆らをゲストに開催した。